

2001年度

# 北海道民族学会通信

北海道民族学会

〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目  
北海道大学大学院文学研究科（文学部）  
佐々木亨研究室気付 tel & fax 011-706-3067  
E-mail sasaki@let.hokudai.ac.jp

題 字：椿坂小籬（鮎の会所属）  
発行者：岡田淳子  
編 集：佐々木亨

## ご挨拶に代えて

2001年6月から北海道民族学会5代目の会長をお引き受けした岡田淳子です。

谷本一之前会長からお話があったとき、この齢でお役にたてることなど無さそうと思いましたが、今までこの会と深く関わってきたことや、運営委員の総意だからとのお勧めで、ついお引き受けすることになりました。もちろん、お断りするの女性として男女共同参画に逆行するという思いもありました。私の名前がどういふ経緯で出たのかは存じませんが、素直に谷本先生はじめ運営委員の皆様のご厚意に応じて、会員の皆様とともに、この会を盛り立てていきたいと思えます。

会員数が増えてきた日本民族学会で、地域活動を盛んにしようと昭和50年代の半ばに各地域の民族学会が誕生しました。はじめ北海道と東北地方は一带でという扱いでしたが、それではまともな難いので、2つに分けて貰うことになったと記憶しています。それ以来、北海道、東北両地区とも研究会は脈々と続けられ、今ではインターネットの助けを借りて、どの地域でどんな研究発表が行われているか、瞬時に解るようになりました。それはまた活動しなければすぐに全国に知れ亘ってしまうことでもあります。

研究発表を記録した「通信」も、事務局の努力によって続けられてきました。手前味噌ですが、この学会が出来たとき何か残さなければと考えて、私は北大・古河講堂の片隅の研究室で、ちょっと強引に最初の通信を作りました。永く残るようにと、題字は書家の椿坂恭代さんに無償で書いていただきました。印刷費の安いところを探して歩いたのも、今は昔の思い出です。今日まで続けてきた歴代事務局のご苦勞には何時も感謝しています。

お互いに研究結果（経過）を披露し、質問や意見を出し合う機会は、知的な楽しさのなかで研究の進展を支えてくれます。北海道は広く研究者が散在しているので、一堂に会して情報を共有するのが難しい状況にありますが、当学会がこのような役割を果たせればよいと願っています。先回の研究会では若いお二人が、伝統的な事物、事象と現代社会の接点に光を当て、次への創造に向かう動きを捉えていました。他地区の研究発表も「民族学研究」の論文も対象はさまざまですが、その辺が焦点になっているように思われます。忙しい時代ではありますが、今後とも多くの会員が参集し、発表し合うことを期待するものです。

つい先頃、日本民族学会第20期の評議員に選出されたというお知らせをいただきました。皆さんが選挙して下さったのでしょうか。私は18期が終わる際に、これからはもっと若い方々にバトンタッチしたいと申し上げたのですが、今期は全国学会との連絡役を務めるために、お引き受けすることにしました。

学会の活性化は何と言っても活発な「研究活動」と会員間の「人の和」だと思います。ご希望ご意見などありましたら、どしどしお申し越し下さい。

そして、総会、研究会には、出来るだけ多くの方々の出席をお待ちしています。

会長 岡田 淳子

(北海道東海大学, E-mail: okada@dn.htokai.ac.jp)

## 中国雲南省に居住するワ族の言語・民俗調査報告

山田敦士 (北海道大学大学院文学研究科修士課程2年)

本発表の目的は、発表者自身が1999年より継続して行っている中国雲南省での現地調査に基づき、今まであまり知られてこなかった少数民族ワ族の言語、民俗などについての初期報告をすることである。

ワ族はモン・クメール系の山岳民族で、主としてミャンマー東部、隣接する中国雲南省西南部とタイ北部に分布し、この地域の最古層の民族と言われている。しかしその民族内部について信頼し得る資料がほとんどなく、全体として実態はあまりよくわかっていない。これはこの地域での調査が政治的理由などにより困難であったという理由による。現在でもワ族の主要居住地域であるミャンマーでの調査、研究は困難なままであるが、その一方、中国側では近年雲南省全域へのアクセスが可能になり、断片的ながら徐々に情報が増加している。例えば、言語という観点からは、ワ族内部にも幾つかのグループがあること、同系民族であるプーラン族のあるグループはむしろワ族に近いことなどが明らかになり、民族間の関係も見直されつつある。

中国国内においてワ族は2つの民族自治県（滄源ワ族自治県、西盟ワ族自治県）を中心に分布しており、この2つの自治県が中国におけるワ族の言語的、文化的な二大中心地となっている。大まかに言って、西盟地区では他民族との接触が少なく、伝統的な生活習慣を比較的保持しており、それに対し、発表者が主に調査している滄源地区では他民族との接触が進み、言語面でも文化面でも急速に変わりつつあるという印象を受ける。例えば、西盟ワ族自治県では牛を突いて神に捧げるという伝統的な儀式が続けられている村があり、また「木鼓」と呼ばれる楽器が幾つか昔の状態のまま残っているというが、滄源ワ族自治県ではそのような光景は見られなくなっている。また言語面で言えば、漢語からの借用語にある [f] 音に対して、西盟ワ族自治県の主要方言ではワ語の音韻体系に照らして [ph] と発音されるのに対し、滄源ワ族自治県の主要方言では本来ないはずの [f] を

発音するようになったなど、特に借用語関係について差がみられる。

ワ族には「スガンリ」という万物の創生に関する民話がある。「スガン」とはワ語で人類が生まれ出た場所を指し、「リ」は「出る」の意味で、「スガンリ」とは「人類の生まれた場所」に関する伝説である。幾つかの地点で同様の話を収集したが、西盟地区では「スガン」が岩穴、つまり人類は岩穴から出てきたのであり、滄源地区ではそれが瓢箪であると見るところに違いがある。しかしその出生地が共にミャンマー側にあり、ミャンマー側から移ってきたという民族の歴史と一致するのは興味深い。「スガンリ伝説」によると、人類は瓢箪もしくは岩穴から出てきた順に長男ワ族、次男ラフ族、三男タイ族、四男漢族とされ、兄弟としてテキストの中で様々に比較されている。現実世界においてもこの3つの民族は隣人であり、最も接触のある民族であるため、常に民話の中で語られてきたのであろう。本発表で紹介したテキストは広い意味で言語観に関するもので、系統関係の異なる3人の兄弟民族の言語についてワ族がどの様に見て、聞いていたか知ることができ、言語学的にも興味のあるところである。

最後に今後の調査についてであるが、実はこのワ語は村ごとに言語が違うといわれるほど、特に音韻面で多様性を示し、東南アジアの言語（特に声調の発生に関して）を考える上で実に興味深い資料を提供する。しかしこれまでの研究はその威信方言のみを対象とし、方言にあまり注意が払われてこなかった。方言全体を把握していないことの弊害は文字政策にも現れ、方言間で普及率が全く異なる原因の一つがここにある。加えて、先ほどの他民族との接触などによる言語の変容を考えると、一つでも多くの方言を記述することの必要性が明らかである。今後は言語政策を行う現地の教育、研究機関と連携し、ワ語の全体的、組織的な記述を進めるようにしなければならない。

## 「観光」をキーワードにした地域振興策の行方

## —青森県H村における観光振興策とそれをめぐる人々—

幅崎麻紀子 (北海道大学大学院文学研究科博士課程2年)

## 1. 問題の所在

近年、過疎化の進む地方自治体では、交流人口を

呼び起こし、村を活性化させるべく、「観光」をキーワードにした地域振興が行われている。東通村にお

いても、交流人口を増やそうと、平成11年度から12年度にかけて、「地域振興方策策定調査」の名のもとに、「観光」を軸とした地域おこしが進められた。本稿では、東通村の地域振興方策策定調査に携わり、観光振興策を提言してきた立場から、「観光」による地域振興方策がどのようなプロセスを経て進められて行くのか、その際、村の中でどのような葛藤が起きるのか等、観光振興の場で起きている問題を抽出することを目的とする。

## 2. 東通村の概要

東通村は、青森県下北半島の北東部に位置する人口8,000人余りの村である。人口は昭和35年の12,449人をピークに、年々減少しつつある。漁業と鉱業を主産業とする村であるが、東北電力東通原子力発電所が平成17年の運転開始に向けて建設中であり、東京電力東通原子力発電所も平成17年度には建設着工が予定されている。

## 3. 観光振興調査の内容

### —「観光」による地域振興方策の骨格—

①東通村地域振興方策策定調査：平成11年度より、観光を軸とした地域振興が進められている。観光振興を進める理由は、原子力発電所建設による人口増が「活性化のチャンス」であり、街の活性化にとって観光振興は不可欠であり、観光振興策を通して「我が村」意識を醸成することができるためである。東通村村長は、「故郷の自然や文化を見つめ直し、私たちの村そして青森県に自信と誇りを持って、訪れる人々を温かく迎える意識を高めてまいりたい。また、自然との共生を図り、観光を軸とした村づくりを進めたく、21世紀の夢広がる観光への展開を図って行く」と述べている。

②住民参加型ワークショップ：東通村地域振興方策策定調査では、行政主導による観光振興を避け、住民が観光振興の担い手となるよう住民参加型ワークショップを開催し、「東通村みどころガイドマップ」を作成した。

## 4. 観光振興推進への期待と不安

東通村地域振興方策策定調査を始めとする観光振興については、村民の中でも期待と不安が入り交じっている。観光によって村が活性化されるのではないかという期待と共に、観光ニーズに応えるにはゆとりがなく、無理に観光振興を推進すべきではないとの意見も出されている。

## 5. 新たな「よりどころ」の創造と新たな状況への対応

①よさまいフェスタ—東通ふるさとまつり—：東通ふるさとまつりは、8月中旬に行われる村最大の祭

りで、もともと、能舞や花火大会、盆踊りなどが中心であった。しかし、「東通村独自の文化の創造」を図るべく、平成12年度には、高知県から振り付けの先生を呼び、「ひがしどおりよさまい鳴子踊り」が創作され、祭りで披露されている。

②田植え餅つき踊り：小正月に行う一年の豊作を祝う行事で、集落内の各家々を回って踊る県の無形民俗文化財。近年では、婦人会の申し入れにより、原子力発電所関連の事業所前でも踊られており、原子力発電所建設という新たな状況を、伝統的な行事の中に組み入れていく姿が見られる。

③能舞：中性芸能の姿を残す修験能で、国の重要無形民俗文化財。県外のイベントでも披露される村民の誇りとも言えるべき伝統芸能である。もともと各集落で小正月に披露されているが、近年、東通村郷土芸能保存連合会発表会（1月上旬）、東通ふるさと祭り（8月中旬）等に、村体育館のステージでも披露されている。集落社会の神事というコンテクストから離れた状況において、「見せる」事への関心が高まりつつある。

## 6. 東通村における観光振興の特徴

①観光振興に対して、担い手である地元住民の間の意識のズレ、村行政（役場）内部でのズレ、地元民と行政とのズレが生じている。

②委員会やワークショップでは、行政主体による観光振興ではなく、村民が自分たちの村の良さを観光資源として活かしていくことが望まれている一方で、観光客が入ってくることへのとまどいが見られる。

③観光振興の方向性は、外から期待される「東通村像」によって影響を受けており、村の内部でもその期待に応えようとする動きが見られる。都市部の人々が期待する「自然や素朴さ等の田舎像」を目指すことで、村も観光振興の方向性に安心感を得ている。

④観光振興のプロセスにおいて、よさまい鳴子踊りのように、新たに村民のアイデンティティのよりどころとなる新たな「伝統」が生まれている。

⑤原子力発電所建設という新たな社会的状況を、「伝統」のコンテクストの中に組み込む等、村の置かれた新しい要素を「伝統文化」に積極的に取り込もうとしている。

このような観光振興のプロセスで見られる地元のリアクションは東通村において特殊なものではなく、国内で観光振興が進められる場合、どの町村でも見られるものであろう。こうした「観光」をキーワードにした地域振興においては、観光振興の現状を見つめ、村民が主体となって進めて行く必要がある。

北海道民族学会 2001 年度第 2 回研究大会発表要旨

(2002 年 1 月 26 日 北海道大学)

## 生き残る民俗技術—秋田県南秋田郡五城目町における野鍛冶—

齋藤貴之 (北海道大学文学部 4 年)

農業や林業における機械化、安くて便利な工業製品の流通などの影響を受け、鍛冶屋は一軒また一軒とその火を消していつている。しかし、こうした状況の中でも力強く生き残ってゆく者もある。そうした鍛冶屋を調査研究することによって、生き残るための術のようなものを得ることができ、そしてそれらは、衰退しつつも生き残ろうと努力を続ける同業者にとって大きなヒントとなるに違いない。今回の発表はこの考えをもとに、秋田県において、4軒6人の鍛冶屋を対象とした、野鍛冶に関するフィールドワーク調査を行い、民俗の生き残りについて考察を行なうものである。

まずは野鍛冶というものについて述べておく。かつて鍛冶屋は、その製作するものに応じていくつかの種類に分けられていた。刀剣等の鉄製武器を製作する刀鍛冶、包丁等の刃物を製作する刃物鍛冶あるいは包丁鍛冶、そして鉄製農具を製作するの鍛冶(農鍛冶)といったように専門化されていたのである。しかし、需要の減少に伴う衰退によりこのような形態は維持できなくなった。そこで、刃物や鉄製農具を中心とした鉄製農具全般の作り手として野鍛冶というものを捉える。

そして鍛冶屋自体も旧来の捉え方とは異なるのである。現在の鍛冶屋は旧来の鍛冶屋と同様の工程を用いて製作を行っている。しかし当然のことながら変化も生じており、時代の流れに応じた機会の導入による効率化が伺われる。サクテイと呼ばれる人々はいなくなりスプリングハンマーへと代わった。炉の燃料はかつて用いられていた木炭からより熱効率の良い石炭・コークス・重油などへと変化した。整形のためのグラインダーや電動の水砥石なども加わった。確かに見た目目の作業風景はかなり様変わりしてしまったかもしれない、けれどもその根底に変化はなく、1から10まで職人一人一人の手により製作され、毎日朝から晩までハンマーのたたく音が鳴り響く。そして出来上がった製品は、工業製品では持ち得ない良さを持ち合わせているのである。変化しつつも、良いところは旧来のままに引き継いで現在も生業として営業を続けている、そんな現代の鍛冶屋が研究対象である。

秋田県南秋田郡五城目町。朝市の町・職人の町として栄え、かつては鍛冶屋街が形成されるほど多くの鍛冶屋が軒を連ねていた。しかし、約400年の伝統を持つ五城目鍛冶も時代の流れには逆らえず、各上一関刃物店、鉦正刃物工場の二軒を残すのみとなっ

てしまった。伝統が途絶えてしまうことを危ぶむ親方等の働きかけもあり、1998年から町主導による後継者を育成するための制度が設けられ、それにより研修生を迎えることができ、明るい兆しが見えてきた感もあるがまだまだ多くの問題を抱えている。そして、この2軒の鍛冶屋もそれぞれの理由によりその歴史に終止符を打つことになり、代わりに研修生であった布川さんを親方とする布川刃物製作所がその歴史を背負うことになった。

その一方で、秋田県大館市の鍛冶屋は高枝切りバサミや果樹園向け剪定バサミなどの新製品の開発によりヒット商品を生み出し、今でも順調に営業を続けている。親方の話からはどんな注文にも応じられる腕、安定した収入が見込める産業とのタイアップ、商品に切れ味以外の魅力を持たせる、地元だけではなくもっと広い地域へのネットワーク作りといった生き残るためのヒントを見出すことができた。

五城目鍛冶の歴史と現状を把握し、それぞれの鍛冶屋の親方からお話を伺ったことで、鍛冶屋という職業自体が持つ難しさに起因する問題や五城目鍛冶が固有に抱える問題、あるいは育成事業がもたらす問題などを見出した。それを加味した上で、大館の鍛冶屋から得た術を五城目鍛冶の現状に当てはめることにより、今後も五城目鍛冶が生き残って行くための道として、職人の町・朝市の町としての知名度を上げる、職人の町の充実、朝市での積極的な販売、より良い技術・知識の習得などを提示することができた。そしてこれらの提言が、今後、五城目鍛冶が発展してゆく上での手がかりになることを期待する。

これは研究対象が現在抱えている問題の解決を図り、今後も生き残って行くための術を模索する研究である。こうした窮地に立たされた民俗(研究対象)を救う研究、そして一つの研究がもう一つの民俗(研究対象)を救うヒントとなる研究、あるいは古き良き伝統を次世代へ残す手助けとなる研究を、次々と研究対象である民俗が失われてゆく中で、危機に陥った民俗学が進むべき新たな道として提示する。

研究対象に貢献する学問という新たな道を歩み、そしてそれに携わる者、つまり研究者は、調査研究を通じて得た人脈をもとに、職人と職人、職人と町の人々、あるいは職人と行政といった人と人とのパイプ役として、ここに貢献するという役割を担うのである。それこそが民俗学の新たな姿であると同時に、柳田国男が提唱した経世済民の民俗学本来の姿かもしれない。